



愛隣幼稚園..... 園だより 14. 3月号

“あそび”の中で育つ

3学期は正味2ヶ月ということにはわかっていたはずなのですが、やはりあつという間でした。特に卒業を目前にしているうみ組の子どもたちには本当に貴重な3学期でしたのに、思わぬ大雪で大喜び（子どもたちは）の月曜日には流行性の胃腸炎で休む子どもたちも増えてしまいました。時は正にX2がいよいよ盛り上がりかうかという時でした。そんな中で“あそび”というのは年齢が大きくなればなるほど、ひとりでは成立しづらいということが顕著になりました。うみ組の“あそび”がなかなか盛り上がっていかなかったのです。3歳、4歳、5歳・・・成長と共に子どもたちが“あそび”の中で満足感や達成感を得る中身は異なっていきます。たんぼ組の子どもたちの“あそび”はみんなと一緒にいて実楽しそうです。が、よくよく観察すると、実はひとりひとりの“あそび”が、その子の中で完結してそれで十分満足しているのです。一方、うみ組の子どもたちの“あそび”はひとりでは楽しくならない、面白くないのです。愛隣の“あそび”中心の生活の中で子どもたちは仲間との間に起こる様々な経験を重ねてきました。たんぼ組の始め、夢中であそんでいる時に隣にいる仲間のことはあまり気になりません。気になる時は、大抵、自分のやりたいことが妨害をうけるようなそんな時です。いっぱい泣いて、なんだかいつも怒っていました。仲間の中にも安心できず、手が出る・足が出るの毎日でしたが、しだいに“あそび”を通して仲間と一緒に笑い合うことが増えていきました。X2にそのことがよく現れています。ばら組になると子どもたちはまたしばらくの間、不安と混乱の中で過ごします。自分や仲間のことを少し客観的に見られるようになって、自分が楽しければもうそれで満足という訳にはいかなくなっています。仲間と自分を比べて自信過剰になったり、自信喪失したり。喧嘩の原因も少々複雑になってきたりします。気持ちの問題が大きくなって、お互いの感情が爆発したりするのもこの頃です。しかしそんな自分自身の中に起こる擦れ合いと仲間との間に起こる擦れ合いは、“あそび”の中で仲間を認めたり、自分に自信がもてるようになることで乗り越えていくことができます。やがて仲間と一緒に作り上げていく“あそび”に子どもたちは夢中になっていきます。そしてうみ組。もう子どもたちの生活の中に仲間はなくてはならない存在です。意見が合わなかったり、我慢をしたり、難しいなあと思うことも諦めずに頑張ったり。仲間と“あそび”を面白くするということはたやすいことではないのです。よほどひとりのほうが楽なように思いますが、そうではないのです。面倒なことはいろいろあっても、仲間と知恵を出し合い、力を合わせて面白いと思ったことに夢中になり、泣いたり笑ったりする生活を彼らは『いい』と思い、その“あそび”の中にどっぷり浸かる毎日を過ごします。その中で得ることのできる満足感や達成感を子どもたちは何よりも心地いいということを手で知っているからです。先週、ホールのくよつばタウンに幼稚園中の仲間が集まりました。子ども同士の関わりを通してうみ組の子どもたちが刺激を受け、もっとおもしろくしたい！というエネルギーで“あそび”の渦は大きくなり、その日の午後にはばら組やたんぼ組の子どもたちの表情も生き生きと輝き始め、こちら自分たちが主役の“あそび”に戻り、夢中になりそれを広げ深めていこうとするエネルギーが幼稚園中に満ちていました。存分に“あそび”こむ生活の中から理屈ではなく、人と人が関わり合う中でその生活は充実し面白くなっていくことを子どもたちが知っていることを嬉しく思う時でした。

大人がいいと思うものを与えられ、教えられ、大人にいいと思われることがいいという幼児期を過ごしてほしくないのです。“あそびを通して”自分が見つけ出したものや考えだしたことが、仲間認められ、共有され、広がり、深まっていく時に、『自分はいいい』と思い、『仲間はいいい』とすることができる。更に『人はいいい』と思える。その確信がその後の子どもたちの歩む人生を、世界を肯定的なものとして捉える力になっていくと私たちは信じているのです。愛隣っ子たち、あなたがたのよい香りで、あなたがたが出会う新しい仲間たちを包んでください。そんなあなたたちを、神様は喜んでくださいます。